

〈池上彰の大岡山通信，若者たちへ〉「どんな本を読んだらよいか。自らの問い，見つけよう」日本経済新聞 6月12日電子版を読む

1. (1) 読みたいものを読みなさい。  
(2) 何に関心があるのかわからない。どのくらいのレベルかわからない。だから、まずは、本屋に行きなさい。関心のあるコーナーを眺めれば、何か発見があるはずです。
2. (1) ユーチューブの教材を倍速で見てわかった気になっても、見たことを説明できない。  
(2) 本の読み手は活字を追いながら、著者との間で双方向で対話をしている。  
(3) 言葉の意味を探し、読んだのちに新たな疑問を追い求める。  
(4) その積み重ねで、知識が刻まれ、理解が深まる。
3. (1) 大事な本は繰り返し読むとよい。  
(2) 一度読めば、どこに何が書いてあるか頭に入る。  
(3) 二度読めば細部にも目が行く。  
(4) 我々には先入観もあるし、その都度の関心で、注意の向く先も変わったりします。  
(5) 同じ街に何度も訪れると、その都度発見があるのと同じですね。
4. (1) 哲学は、問いから始まります。  
(2) 当たり前に見えることを、疑い、探求するには、訓練が必要かもしれません。  
(3) わからないと正直に言えることが大事。
5. (1) 日常の疑問を大切にすること。  
(2) 学生のころは、「知の虚栄心」みたいなものがあり、同級生の知識に刺激されることが学びのきっかけになりました。
6. 知ったかぶりをしながらでも、疑問を広げ深めていけば、学ぶ甲斐(かい)もあるというものです。

#### <コメント>

素晴らしい内容です。特に著者との対話で意味を探し「知識を刻む」「理解を深め」、「自分のことばでいえる、説明できる」ようにすること、「疑問を深める」こと、の大切さが実感できる文章でした。